

日本の雪崩災害 DB からわかった那須町雪崩災害の背景

和泉 薫（なだれ防災技術フォーラム），納口恭明（防災科研）

1. はじめに

2017 年 3 月 27 日午前 8 時半頃、栃木県那須町的那須温泉ファミリースキー場のゲレンデ上部でラッセル訓練中の県立大田原高校山岳部生徒らを「天狗の鼻」付近から発生した雪崩が襲い、生徒 7 人と引率教員 1 人が死亡する事故が発生した。本稿では日本の雪崩災害データベースなどの調査から浮かび上がったこの雪崩災害の背景について報告する（日本の雪崩災害 DB：www.nhdr.niigata-u.ac.jp/nadare_db/）。

2. 2016/17 冬期の雪崩災害発生状況

Web 上の新聞記事などから 4 月 10 日までに収集した 2016/17 冬期の雪崩災害は、日本全国で 18 件発生し、15 人が死亡している。このうち登山・山スキー・スキー場など冬期レジャー関連の雪崩災害は 8 件あり、それによる死者は 14 人で、その 6 割が那須町雪崩災害によるものである。しかも、春先の天候不順が影響し全体の半数近くの 8 件が 3 月に集中している。那須町雪崩災害も、南岸低気圧通過による季節外れの大雪（アメダス那須高原における 3 月 27 日の日降雪深は 35 cm）がもたらしたものと言える。

3. 栃木県内における雪崩災害の発生傾向

日本の雪崩災害 DB などによって明治以降 2017 年までの雪崩災害の発生状況を調べてみると、栃木県内では全体で 35 件の雪崩災害が発生している。市町村別では日光市が最多の 24 件で、次が那須町の 7 件と、全体の約 9 割がこの 2 市町で占められる。那須町の雪崩災害は 6 件までが那須岳周辺で発生し、那須岳スキー場でも 1969 年 2 月 9 日と 1973 年 1 月 12 日に、今回の雪崩災害の場所に近接した第 2 ゲレンデ上部から発生している。前者ではスキーヤー 15 人が巻き込まれたが自力脱出または救出で全員無事、後者ではスキー大会の役員・選手ら 4 人が巻き込まれたが 1 人負傷しただけで全員無事であった。また、那須岳付近の山岳では、これまで登山者が遭遇した雪崩災害が 3 件発生し 4 人が死亡している。このようにこのスキー場周辺は雪崩に対して“100%安全”ではなく、これまで雪崩災害で死者がでなかったのが不思議なぐらいの場所である。

4. 栃木県立佐野高校山岳部の雪崩災害

1950 年 12 月 30 日、谷川岳登攀に挑んでいた佐野高校山岳部パーティ 11 人は、大雪のため登頂を断念し西黒沢沿いに下山を始め、ザング沢と本沢の合流点付近まで到達したところで朝食の最中（8:40）ガレ沢方面からの雪崩に巻き込まれ、引率教諭 1 人と男子生徒 4 人が死亡した。遭難直後の 12 月 31 日、捜索隊が 5 人の遺体を発掘したが下ろすことができず高みに安置せざるを得なかった。捜索活動はその後断続的に行われたが、遺体が再発見されたのは半年後の 6 月 13 日であった。

この事故後、報道に「高校生が冬山に登ることそのものが非常識」や「地元公安委員の登山禁止の処置を無視して登山した」などの批判が相次ぎ、山岳部を廃部にするべきという議論もあった。しかし事故後、栃木県山岳連盟の S 氏の「西黒沢は谷川岳では一番安全な沢で、雪崩は必ずしも傾斜の強い所だけに限らない。雪崩の危険性を見極めることが登山家の大切な技術であり、それを見極めて最善を尽くしても不慮の状態が発生するならば、それは不運といわなければならない。西黒沢を通ったことは決して誤りではない。」や当時の佐野高校長の「事前の現場踏査、雪崩に対する考慮など万全の注意があつての遭難で、運命と見るより仕方ない。事故のため山岳部を廃止すると噂されることは、本校の意気に関することだけでなく日本のスポーツ界に相すまぬことであるから、全く無根の誤報である（から廃部はしない）。」といった読者投稿が地元紙に掲載されている。現在の高校山岳部を取り巻く状況は当時とは違っているはずだが、今回の那須町雪崩災害の指導者達の考え方の根底には相通ずるものがあるように見えるのは、私だけであらうか。

参考文献：栃木県立佐野高等学校八十年誌（1983）